

えて、政治と宗教の関係に関心をもつ他地域の研究者にとっても、一読の価値があるだろう。

中谷哲弥、『インド・パキスタン分離独立と難民—移動と再定住の民族誌』明石書店、2019年、503 p.

井上登紀子*

本書はイギリスによる植民地支配の終焉に伴うインド・パキスタン分離独立によって難民となった人々の民族誌である。本書はこうした人々に注目し、「分離を伴った独立が、人々にどのような影響を与え、何をもたらしたのか」(p. 19)を明らかにすることを目的としている。そこでは、著者が「公的な制度をかいくぐりながら生きてきた分離独立難民の経験や生活世界、地域社会の構築などについて、分離から現在に至るまでの長いスパンの中で扱うことこそを眼目とする」(p. 37)と述べるように、難民を法的・政策的な存在として扱う国家の視点、短期的な緊急援助の対象として扱う人道支援の視点からは見落とされてきた難民の姿や生活世界が描かれている。

本書は序論、結論を除く3部10章から構成されている。以下、本書の内容を概観する。

まず序論では、本書の問題意識を明らかにするとともに先行研究を概観している。分離

独立に関する研究は、政治に注目し分離の原因を探ることを目的としたものが中心であり、分離によって生じた社会変化はあまり注目されてこなかった。著者は、分離独立難民に関する先行研究の課題として、都市部のボドロクと呼ばれるホワイトカラー層を扱ったものが中心であること、また、サバルタン研究の流れをくむ研究では、個々人の語りや内面に注目するあまり、彼らの生活空間や地域社会の構築に関する視点が欠落していることを指摘している。

第1部では、分離独立に至る歴史過程と南アジアにおける難民問題の概要、分離独立難民の流入動向と政策について論じている。植民地支配下の政治過程でヒンドゥーとムスリムのコミューナルな対立が深まり、独立に伴う分離によってインドとパキスタンという2つの国家が誕生した。その際の最大の課題は国境策定であった。元来ムスリムとヒンドゥーはインド全土に混在して暮らしていたが、両者が「連なって」いる地域に国境を引くという作業は混乱や暴力的事態をきたした。また国境の両側では人口の3割に近い宗教的マイノリティが生まれ、難民が発生した(第1章)。分離に伴う難民は大きく分けてパンジャーブ～西パキスタンとベンガル～東パキスタンの2つの地域で発生したが、その動向と難民政策は大きく異なっていた。西パキスタンからの難民の移動は短期間で完了したとされるのに対し、東パキスタンからの難民の流入は不均衡で長期にわたったうえ、土地不足のため再定住には困難が伴った(第2章)。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

第2部は、西ベンガル州・ノディア県の農村に住む東パキスタン出身のヒンドゥーの難民／避難民を主な対象とし、移動や再定住のプロセス、その後の展開について考察している。人口の大多数が東パキスタンからの移住者で占められ、大半を低カーストが占める調査村では、1950年代初頭までに移動した農民カーストのマヒッシュョや漁民カーストのマロをはじめとする分離独立により分断された旧ノディア県出身者と、1970年代まで移動が継続した東ベンガル(現バングラデシュ)のフォリドプル出身の農民カーストのノモシュードロという2つの大きなグループが存在していた(第3章)。著者は、調査村における主な再定住パターンとして、政府によるリハビリテーション、流出したムスリムと流入したヒンドゥーとの間の個人的な「財産交換」、自力での再定住を取り上げ、再定住の形態について土地問題に着目しながら論じている。著者はここで、再定住のための戦略と移動の時期や距離、カーストの要素との関連性を示している(第4章)。

調査村での再定住後の地域社会の構築と難民の自己規定には、「フォリドプルのガンディー」と呼ばれたソーシャル・ワーカー、チョンドロナト・ボシュと住民による協働が深く関わっていた。ボシュとの協働はノモシュードロの人々に、自分たちこそが何もなかった地域を開発した開発者であるという意識をもたらし、その精神はボシュの名を冠したNGOの活動により現在まで受け継がれている。著者はこうした活動に政治性だけでは還元できない難民の行為主体性を見出してい

る(第5章)。また、著者はノモシュードロの間で信仰される宗教や村の宗教行事の事例を分析し、難民集団間の相互関係を論じている。ここでは、同じカースト内でも宗教・文化意識に多様性があることや、カーストを準拠枠とする移動の時期や記憶にもとづく宗教・文化的価値の差異が、宗教行事だけでなく難民集団間の関係にも反映される様子が描かれている(第6章)。

第3部では都市部の事例としてデリーの東パキスタン避難民コロニー、チットロンジョン・パークを取り上げている。今日「ミニ・ベンガル」と呼ばれるこの瀟洒な住宅地は、農村の事例とは対照的に、東ベンガルの故郷を失ったボドロロクと呼ばれるホワイトカラー層が中心となった主体的な運動により建設された。自らをベンガル語の表現で「国によって拒否された」(p. 295)「難民」ではなく「住処を奪われた／失った」(p. 295)「避難民」とする自己認識に彼らの行為主体性は立脚しており、地域の開発が進むにつれ「避難民」や「東」といった要素が後景化するなど自己認識は変容していった(第7章)。ただし、世帯調査からは、分離独立以前から教育・雇用の機会を求めて移住したボドロロクだけでなく、分離に伴う暴力から逃れてきた「難民」に近い者を含む多様な人々から成ることが明らかにされ、彼らの東ベンガルの記憶についても考察されている(第8章)。

デリーの難民／避難民コミュニティの生活空間の構築においては、政治的陳情、住民サービス、医療福祉、教育などさまざまな活動を行なう「ベンガル人」のアソシエーショ

的連合が重要な役割を果たしており、そのネットワークはチットロンジョン・パークの領域を超えて広がっている。一方で、数世代にわたるベンガル地域外での居住やデリーのコスモポリタンの環境の影響を受け、人々のアイデンティティは単なる同質的「ベンガル人」ではなく、状況に適応的で重層的、かつ選択的なものとなっている（第9章）。また、ベンガルで重視されるドゥルガ・プジャ（ドゥルガ女神への祭礼）に焦点を当て、デリーにおける近隣関係の構築について論じている。ドゥルガ・プジャは独立以前からベンガル人コミュニティで行なわれてきたが、近年のプジャの肥大化や市場主義の介入による変容を受け、住民の間にはプジャを「親密さ」「伝統」「パーソナル」といった観念により再定義する動きもみられる。一方で、不動産開発と地価高騰はベンガル人の流出を招いており、デリーの都市化や再開発は「ミニ・ベンガル」に揺らぎを与えている。

結論では各章の内容を概観し、序論で示した大きな問題意識との関連で本書の意義を改めて述べるとともに、デリーの事例にみられる言語や世代間の問題など、海外移民と国内移住者が抱える問題の類似性を指摘し、都市部における移住者への視点をインド社会研究の新たな課題として提示し、論を閉じている。

本書の重要な意義は、分離独立に伴う難民の長期的な社会変化を、生活基盤や社会関係の構築、社会奉仕活動や宗教祭礼をとおした自己認識の変化などさまざまな角度から、また長期的なスパンで明らかにした点である。

特に興味深いのは、こうした変化を論じるにあたって、地域社会での活動で発揮される難民の行為主体性に注目し、彼らの自己規定が「難民」から「社会奉仕者」や「地域の開発者」（第2部）、「避難民」から「デリーのベンガル人」（第3部）へ転換されていく過程の記述・分析である。ここではホスト社会による「統合」や「共生」の政策によるものは異なる、難民自身による生活空間の構築の様子が描かれているだけでなく、時代の変化とともに「難民問題」という狭い枠組みには収まらない多様な社会変化が生じる様子が明らかにされている。

注文をつけるとすれば、分離独立難民に対する国家の処遇についてさらに言及があれば良かった。分離独立によって引き起こされた暴力や、これを機に難民となった人々の経験した困難の背景には、Chatterji [2012] が論じるように両国での「市民」の定義が曖昧なまま国境が引かれたという歴史的経緯があった。しかし、その後本書で論じられているように、政府による支援が不十分ななかでも難民たちが新たな土地での生活基盤を築いたり、「デリーのベンガル人」になることができたのは、インド政府が彼らを（宗教的帰属にもとづいて）統合の対象とみなしていたからだと考えられる。これに対し、Chowdhory [2019] が扱うタミル難民（スリランカ）やチャクマ難民（バングラデシュ）は、インド政府から統合の対象とみなされなかった。受け入れ国での権利が保障されないことから、彼らはインドに帰属意識をもたず、自発的な帰還へと向かった。こうした対

照的な事例が示すように、「難民」の発生はネーションという擬制的な概念に支えられた国民国家の擬制性に帰結し [加藤 1994], また難民の帰還への意識や自己認識も国家が誰を「国民」とみなすかに規定される。元来域内移動が盛んであった元英領インドの諸地域で生まれた「難民」は、独立一国家樹立のプロセスにおける「真正な国民は誰か」をめぐる対立や交渉のなかで生まれたのであり、彼らの辿った軌跡の多様性はその恣意性を浮き彫りにする。国家の恣意性によって一方では国籍を否定され、他方では国民として統合されることになった分離独立難民は、難民を「国家を必要とする者」とみなす国民国家制度を前提とした難民問題の議論に大きな問いを投げかける存在である。

引用文献

- 加藤 節. 1994. 「国民国家と難民問題」加藤節・宮島喬編『難民』東京大学出版会, 1-20.
- Chatterji, J. 2012. South Asian Histories of Citizenship, 1946-1970, *The Historical Journal* 55(4): 1049-1071.
- Chowdhory, N. 2019. *Refugees, Citizenship and Belonging in South Asia: Contested Terrains*. Gateway East: Springer Singapore.

古澤拓郎. 『ホモ・サピエンスの15万年一連続体の人類生態史』(叢書・知を究める 15) ミネルヴァ書房, 2019年, 274 p.

寺嶋秀明*

21世紀という時代に入ってはや20年が過ぎたが、前世紀前半における悲慘きわまりない世界大戦の反省のうえに打ち立てられた平和主義、国際協調、共存共栄などの戦後世界の理念や秩序が大きくくずれ、世の中は分断と対立、扇動と盲従、知恵よりも武力・金力、巨大な格差や貧困の蔓延、人権の空洞化、多様性の否定といった、かつて通った道へと戻りつつあるようだ。日本でも世界でもさまざまな分野で人と人を区別し差別する風潮が蔓延し、まちがった歴史理解や科学知識に基づく差別、自己中心的な差別、そして空虚な言葉のやりとりが横行している。本書はそのようなあやうい時代へ一石を投ずる人類学的啓蒙書である。

著者は「あとがき」で次のように語る。「この本の趣旨をあらためて考えてみたい。人間は同じ一つの生物ホモ・サピエンスであり、それが多彩な姿をしめす連続体=スペクトラムなのだということを書いてきた。これによって私たち人間はお互いに差別はできない連続した存在であるし、異なる文化や異なる身体形質を持つことと、それを理解し尊重することの大切さを示してきたのである」(p. 243)。たしかに上記のような時代だから

* 神戸学院大学人文学部